



新半田病院の建設について



半田市長 柳原純夫

市民の皆様はもとより、近隣市町の皆様にも愛され頼られてきた半田市立半田病院は、現在の地に移転して34年が過ぎました。

移転したのがつい昨日のように思われますが、実際には日々の診療行為にも影響する破損や不具合が各所で発生しています。例えば、大規模地震が発生した場合、手術や診療で使う医療機器が転倒し、血管とも言える給排水設備は劣化により破断し、医療業務が停止することが予想されます。また、増加した医療機器は、廊下や手術室に置かれて、医療業務や移動の支障となっています。

私は、こうした現状を解消するには、新病院の建設しかない判断し、昨年7月、名古屋大学病院長の石黒直樹先生を座長に、医療、経営、利用者・市民など各分野の委員10名にお願いして「半田病院あり方検討委員会」を設けて、新病院の機能、役割、施設規模、建設位置などについて幅広い検討をお願いいたしました。その結果、今年4月26日に「新病院

構想」の答申書をいただきました。

その答申では、「半田病院は業務継続にあたって多くの課題を抱えており、建て替えが必要である。新病院開院までの期間が長引けばそれだけリスクも拡大し、大規模改修は避けられず高額な費用を要するため、出来るだけ早く建設することが必要である。建設位置については、医療業務の継続が確保される位置で、多くの人々が利用しやすい交通条件にあり、建設費用は病院事業を圧迫しないよう絞り込むことなどを基準として、市内で建設可能な候補地13か所を比較検討した。その結果、公共交通や道路網が利用しやすい環境にあり、用地確保が容易で早期に建設が可能な、現病院の北にある市職員駐車場一帯が相対的に適地である。自然災害に対しては、国・県の調査では最大の地震津波、高潮でもこの土地は浸水せず、病院の業務継続は可能と判断する。しかし、周辺道路の浸水に対する迂回路の確保、液状化対策、バス路線の充実をするよう

に」との内容でした。

私は、委員全員一致でいただいたこの答申を重く受け止めるとともに、今年4月に発生した熊本地震で、やはり耐震性の乏しい熊本市民病院が病院機能を停止してしまった姿を目の当たりにして、耐震・免震性の高い病院を早く建設することが必要だと強く感じ、市職員駐車場に新病院を建設することを判断しました。市民の皆様も心配される自然災害への備えですが、この一帯は多くの人が犠牲となった伊勢湾台風の後、堤防強化、排水機場建設、近年では護岸の耐震整備、阿久比川堤防の耐震補強、橋の落橋防止策などを実施してきました。南海トラフを震源とする巨大地震では、県が発表した「理論上最大規模の被災モデル」でも津波がこの候補地を襲うことはなく、広域への道路網は確保できます。液状化も、300年以上経過した干拓地では極端な液状化は起こりにくいとされていますが、より安全を期するため、候補地南の道路の液状化対策

工事を実施いたします。

高潮被害では、平成26年7月に発表された国の調査報告では、500年から5000年に一度の確率で発生する巨大台風でも、高潮でこの候補地が浸水することはない、さらなる強化策を行えば医療の継続は可能です。しかし、周辺道路では浸水が想定されるため、浸水しない阿久比川右岸堤防に救急輸送道路を整備して、国・県が最優先で通行を確保する県道碧南半田常滑線に直結させることで搬送ルートを確認いたします。また、重要な道路地点はかさ上げし、浸水時でも走行能力の高い救急移送車両を導入するなど、万全を期してまいります。

去る9月25日に病院建設の説明会を市役所で開催し、以上のような内容をお伝えして、賛成・反対の貴重な意見をいただきました。私は、平常時には便利で利用しやすい位置にあり、建設までの期間が短く、費用も低減できるこの候補地に、災害時でも病院業務が継続できる万全の備えを行って、皆様に親しまれ、安全で質の高い医療が提供できる新半田病院の建設を進める覚悟であります。

なにとぞ、市民の皆様のご理解を賜りますようお願いいたします。